

【第一分科会】①

反保千佳子先生(福井・福井県立丸岡高等学校)

吉川晶子先生(福井・福井県立金津高等学校)

21世紀の教育に求められる資質・能力を踏まえた授業研究の方法

～図工・美術指導ユニットを軸とした中高連携の取り組み～

[最初に]

名前の印象から「造形ユニット」を、授業内容を画一化するものと捉えている方がいるようなので、確認のために書きます。

この「造形ユニット」は、教師間で美術教育のねらいを共有し、ねらいに向かうための各自の指導の工夫を共有するための手立てです。生徒がこの題材の授業が自分にとって大事だと納得がいく、将来の力(生きる力)として役立つ、ねらいを明確にした授業と指導の工夫を共有し合える場をつくり、生徒により豊かな授業を提供するための授業研究の工夫です。ひとつの型や形式を押しつけているわけではなく、共有しあうことを勧めているものです。

Q 1 ユニットはどのくらい活用されているのでしょうか？また、作成者以外に加筆修正はあるのでしょうか？

A ウェブサイトが新しくなりました。現在は、「造形ユニット」は県内においては、各校種の担当者が文章の確認をしてから、アップするようになっています。アップ後の訂正は本人が行います。

Q 2 ユニットボックスの管理や予算はどのようになっていますか？

A 小・中・高教研の研究推進員が作成を支援し、拠点校が道具ボックスを管理する組織になっています。ここ数年、予算は研究助成金を県からもらって行っています。

道具ボックスを使用した中学校が、同じ道具を学校で購入してもらえる事例も出ています。

その他、今回の発表の対象になっていた坂井地区には中高連携のための予算があります。その使い道は学校によっていろいろですが、丸岡地区では近年の美術教育の取り組みから、中高連携の部活動予算を美術部に3万円あててくれることになりました。その予算で、日本画のユニットボックスを作りました。

おそらく、いろいろと探っていけば、あるいは活動をしていけば、その成果を認めて予算をつけてもらえることも出てくると思います。

現に、坂井地区の三国高校でも今年度から中高連携の予算を1万円、美術部(美術教育)につけてくれることになりました。

Q 3 ユニットシートの内容を詳しく知りたい。

A 新しいウェブサイト「造形ユニット」の型の変更歴史が載せられています。

Q 4 ユニット指導による細部の差や、「教えた内容をやりたい」という意見はない

ですか？

A 勘違いされています。〔最初に〕をご覧ください。
「指導ユニット」は、指導者がそのまま使わなくてはならないものではなく、授業の参考にしてもらうものです。また、ユニット枠を使うことによって、自分の授業のねらい等の確認にもなります。

Q5 同じ内容になる危険性はないですか？多様性に欠けるのでは？

A 勘違いされています。〔最初に〕をご覧ください。Q4と関連しています。

Q6 ユニットをつなげる点での問題点を教えて欲しい。

A 美術教育全体でねらい（コンピテンシーなど）が共有され、適切な年齢で適切な題材が提供され、すべての生徒に充実した授業が提供されていると言える現状ではないという課題意識を持って「造形ユニット」を考えました。

しかし、これは、作成しながら考えを練っていく中で授業力向上が見られるものなので、各校種の研究部推進員が会議を開いて校種連携して学び合いながら、その輪を広げていく必要があると考えています。なかなか会議の時間は取れないので、推進員を中心に、気軽に地域の教員同士が声を掛け合って、気軽に広げていく形で浸透していくやり方がいいのかなと思います。

Q7 日本画を取り上げた理由は何でしょうか。

A ①福井県の越前和紙の利用
②福井県ゆかりの文化人に関連

③県が芸術に予算をつけた など 複数の理由から、ここ数年 小学校5年、中学2年、高校1年に日本画材料を配布してもらっています。同じ題材を体験した生徒が高校に上がってくるので、連携した授業研究の展開を考えて取り上げました。

しかし、ユニットに関しては、日本画だけのものではありません。さまざまな分野にひろげているところです。

Q8 ユニットはシステムの研究のためのものですか？

A 〔最初に〕参照してください。校種連携した授業力向上の研究のための一手段です。

Q9 技能技術の向上が主のように感じますが、学習指導要領の目標と一致するのでしょうか？

A 〔最初に〕参照してください。どの授業カ所を取り出した指導ユニットかにより、知識・技能の指導の部分、発想の部分などに分かれるでしょう。学習指導要領の

目標と当然一致するでしょう。

Q10 小中高をつなげるベースは以前からあったのでしょうか？

A ないです。地方の美術教員が校内からいなくなる状況が止まらない現状から生み出されました。免外教員が片手間でできる教科だと思われてしまっている現状から、

①美術教育のねらいを明確にして伝え、教科指導は専門性が必要だと認識してもらうため

②専科のいない地方の学校と専科がいる町中の学校の授業レベルの差をなくするため

に教育研究所と現場が生み出した手立てです。